

昭和49年度  
(1974)  
第14回大会

男子優勝 札幌西

女子優勝 札幌静修

【 専門委員長 寸評 】

団体戦は男女とも札幌同士の決戦となったが、ダブルスに主力を集めた札幌西、豊富な持ち駒の静修が栄冠を勝ちとった。

個人戦は、旭川勢の進出が目立ち、団体優勝の静修の総崩れが大きな番狂わせであった。テニスが普及し質的な広がりを見せたというべきか。若手では2年生の和泉（札幌東）が単・複とも決勝進出したのが注目される。

【全国大会】

気候の差ということもあるが、健闘しながら、もう一步押し切れないという試合がいくつもあった。特に団体戦男子では、単・複ともタイブレークで敗れているために、悔やんでもあまりある1戦であった。

個人戦は対戦相手の強弱による運、不運もあるが、今年は初戦からベスト4、ベスト8級にあてられるものが多く、健闘しながらも力の差を見せつけられたものが多かった。

例年、大会後の反省でいつも言われることであるが、やはり経験不足の印象は否めない。ストロークでは同等、またはそれ以上の場合であっても、ポイントの取り方、ゲームのかけひきの点で大きな遅れが見られる。とくにテニスの場合、裏日本と表日本との差が大きいだけに、表日本との対戦にそれがはっきりとうかがわれる。

ゲームの量を増やすとともに普段の練習でもボールの一つ一つを大切に打つ心掛けが必要であろう。

幸い本道でも加盟校が増大してきた。底辺の拡大が切磋琢磨の機会を増やし、レベルアップにつながることを期待している次第である。

( 専門委員長 亀山 省吾 )

## 優勝のよろこび

男子 札幌西高等学校

我々の高体連に賭ける意欲は秋季新人戦で一時打ち砕かれた。絶対優勝するのだと我々2年(当時)は考えていた。しかし、東高に敗れ去ってしまった。あと半年あるとはいえ、あせりが生じたことは確かである。

冬を越し昭和49年春季リーグ戦までに残った2・3年生は全部で6人であった。東高だけには勝つという目的で大会に臨んだ。結果は4位である。

しかし、優勝した東高に一矢を報いたことが我々の大きな励みとなった。その時から優勝を念頭において練習する事ができた。

地区予選までの1ヶ月間我々の胸中は「また東高に勝てるのか」と云う不安と優勝への意欲に交互に襲われたものである。そして6月1・2日の地区予選では東高と当たった。東高と対戦する時の我々は、異常な殺気を帯びていたことは忘れられない。精神力で東高を下した。気の緩みで決勝では危なかったが、やっと南高に勝って優勝した。喜びは当然であるが、まだ全道大会がある。当然の如く個人戦は無視して団体だけを勝とうと必死であった。そして我々西高庭球部にとって、特に3年生3人にとって6月13日は、それまで弛まぬ練習が報われた喜びを深々と味わった日であった。「優勝」という栄光の裏には必ず影の力が働く。

絶えずコートを訪れ強化を図って下さった先輩達や、優勝への大きな支えとなった後輩や友人が大勢いる。これから伸びる者にも「皆で勝つ」事がいかに大事かを知ってほしいと思うかぎりである。

## 優勝のよろこび

女子 札幌静修高等学校

高体連誌 記録のみで掲載なし

全国高校総体(第64回全国高等学校庭球選手権大会) 福岡

8月2日～8日

福岡県営東公園テニスコート

九州大学工学部テニスコート

男子 個人戦シングルス 優勝 福井 烈(柳川商業)